

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2015 夏号 **71**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 和歌山城跡の整理



和歌山城跡 調査地と三の丸跡地

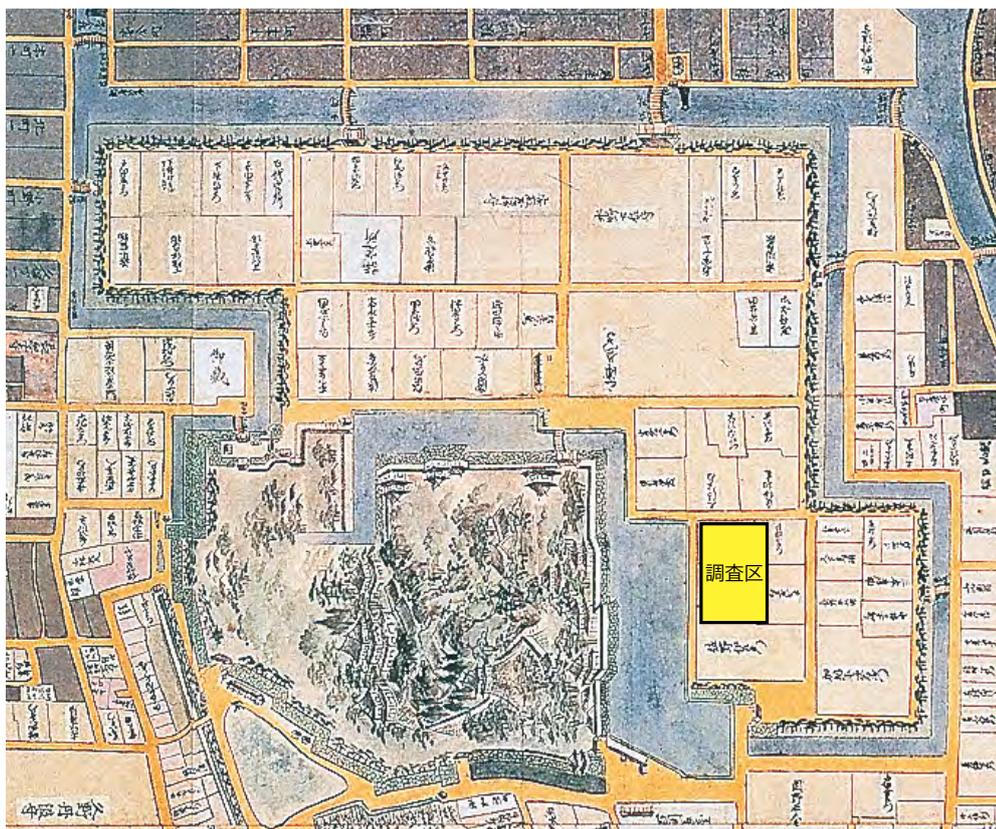
特集 和歌山城跡の整理

はじめに

和歌山城は、言うまでもなく徳川御三家のひとつ、紀州徳川家の居城です。築城以来何度となく火災により天守などを消失していますがその度に再建されてきました。

現在の建物は、昭和二十年七月の和歌山空襲によって消失したあと、昭和三十三年に市民の浄財などにより再建されたものです。現在、内堀に囲まれた本丸や二の丸跡は和歌山城公園となっており、和歌山市を代表する観光スポットとして、また市民の憩いの場としても親しまれています。

「和歌山城」というと、



和歌山城下町絵図

一般には今述べた内堀に囲まれた和歌山城公園の範囲を思い浮かべがちですが、実際はその何倍もの広さがありました。とくに現在和歌山市役所などの大きなビルが立ち並んでいるお城の北側、中央郵便局や裁判所などが所在する東側は、かつての三の丸と呼ばれたお城の一角にあたります。この三の丸には、主に家老をはじめ大身、高禄の武家屋敷が配置されており、お城を防御する最前線としての機能を担っていた地区と言えます。

当センターでは、平成二十二年度にこの三の丸の一角、裁判所の建替え工事に伴って発掘調査を実施しました。調査については、すでにこの「風車」(59号)でも詳しく紹介させていただきましたが、この調査の後、昨年度ほぼ一年をかけて整理業務を実施し報告書を刊行しました。整理業務というのは、調査終了後に出土した遺物や現地で記録した図面などの整理・分析して調査の成果をまとめ、報告書として刊行する作業です。普通、現地での調査が一年かかれば、ほぼそれと同じぐらいの時間を要する地道な作業と言えます。

今回は、あまり馴染みのないこの整理作業の紹介をさせていただきます、併せて整理を通して見えてきた当時の武家屋敷の様子や生活ぶりについても紹介したいと思います。

整理作業の内容

整理作業の基本は、まず現地で出土した土器や瓦といった遺物の土を落とし、きれいにする「洗浄作業」からはじめます。いわば土器の洗濯ですね。ふつうの洗濯にも手洗いや温湯を使ってといった具合に、気を使わなければいけない衣服があるように、土器も種類によってその洗い方はさまざまです。たとえば、須恵器や磁器といった比較的硬質の焼き物についてはブラシなどか思い切った洗いますが、土師器などの軟らかな土器は、刷毛を使って慎重に洗って



洗浄作業



注記作業



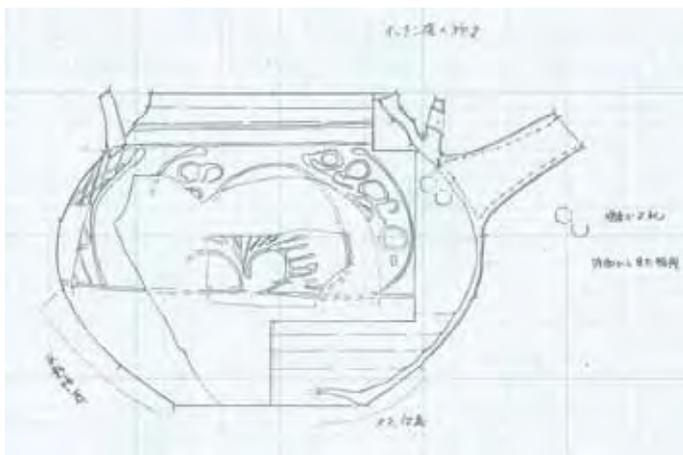
接合作業



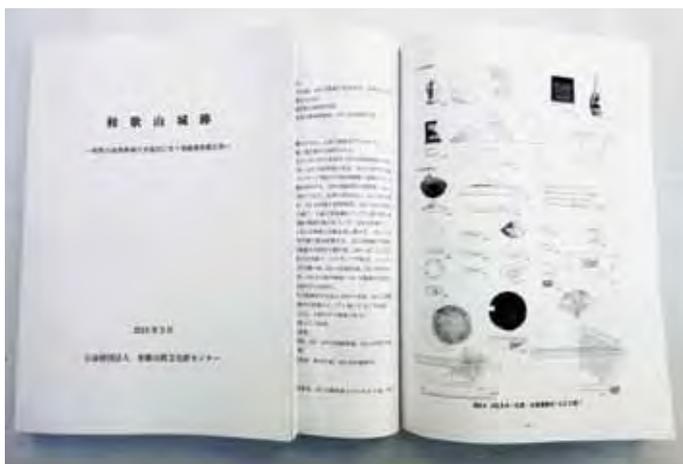
復元作業

きます。そうしないと土器の表面に残っている製作時の手で撫でた跡や形を整えた痕跡（調整技法）が消えてしまうのですね。こうした洗いが終わった後は「注記作業」といって、土器一点一点に筆をつかってどこから出土したもののなかを示す、小さな文字や記号を記入していきます。この作業をやっておかないと土器を動かしたりしたとき、何処から、あるいはどの層から出土したものかわからなくなってしまいます。発掘と言うのは、単に掘って土器を見つけるといえるのではなく、その土器が何処から出土しているのかという情報が重要です。さて、このふたつの基礎作業を終えた後

は、いよいよ「接合作業」です。この作業については、テレビなどでお馴染みですが、土器の小さな破片をジグソーパズルのようにしてくっつけていく作業です。一見簡単な作業に思われがちですが、市販のジグソーパズルとはちがいが、すべてのパーツが揃っているわけではありませんから、かならずくっつくとは限りません。また、破片が底部のパーツなのか胴部のパーツなのか、つまり土器全体のイメージがないとそう簡単に接合できるものではありません。そういう意味では熟練の技を要する作業と言ってもいいでしょう。接合が進み、ある程度形が出来上がって



土器実測図（原図）



完成した調査報告書

には土器の断面を描きます。

そうすることによって土器の形とともに内面の様子や土器の厚さを表現することができます。

また、単に土器の形状だけではなく、その土器を作る過程で、粘土を積み上げていった様子

や仕上げのときに指でナデているのか、刷毛を使って調整しているのかといったさまざまな技法を観察し、記録にとどめていきます。絵心だけではなく、観察力が問われる作業と言っています。

こうして出来上がった土器の図や現地での調査で作成した遺構図についてトレース作業を行います。このトレースについても以前はロットリングペンを使って“墨入れ”をおこなっていましたが、最近ではイラストレーターなどの描画ソフトを用いてパソコンでもやるようになってきました。

このような作業を経て出来上がった図

面・写真などを組版し、文章を執筆して最終的に報告書を作成します。

発掘調査というと、単に現地で土を掘り、土器を取り上げているだけのイメージがありますが、こうした整理作業を経て報告書を刊行し、全国の関係機関に送り届けてようやく完結する仕事と言えます。このことによって調査に従事した人だけではなく、一般の人々もその調査成果を共有し、活用することができるようになります。

整理作業の成果

さて、今述べてきた今回の整理作業を経て見えてきた成果の一端、垣間見えた当時の生活の様子やエピソードなどを最後に紹介しておきましょう。

調査地は先に述べたように三の丸の一角で、複数の武家屋敷地にまたがります。当然ながら江戸時代を通してご当主は代わっており、このうち調査区の北西部、最も大きな敷地を占める屋敷地に着目すれば、江戸時代の各期に描かれた絵図から十七世紀中頃には加納十兵衛、十八世紀初頭には水野次郎右衛門、十八世紀末には向笠家の屋敷地になり、幕末の頃の当主・向笠三之助は勝海舟と親交があったことが知られています。

食べ物について言えば、カキ・サザエ・

から「復元作業」に取り掛かります。どうしてもパーツが見つからず、欠損している場合には修復材を補っていきます。以前は歯科用の石膏を使っていましたが、最近ではQテックスとよばれる補修用の削れるセメントのような材料を用いることが主流になってきています。大きいものですと復元の途中でひずみが生じたりしますから、それを計算に入れて立ち上げていくなどこの作業も熟練を要すると言っています。

さて、こうして出来上がった土器について

では、実測図と違って土器の絵を描きます。左側には土器を外側から見た様子を、右側



刀装具の小柄

ハマグリ・クロアワビ等の貝殻が数多く確認されていることから日常的に食していたと思われます。これらの残滓や日常生活の中でいらなくなったものを破棄するため、屋敷地の最も奥には大きな廃棄土坑が掘られていました。それも繰り返し掘られていたことから「不燃物」の処理に手を焼いていた様が窺われます。

武家屋敷地ですから当然写真のような刀装具の小柄も出土していますが、硯や水滴などの文具類も多く出土していました。また、御香を嗜んでいたように鳥の形をした香合が出土しています。この香合は、



黒釉鳥形香合

手びねりの軟質黒釉陶器で、内面には金箔を貼っていた痕跡が認められました。珍重していた様子から、もしかすると藩主から拝領した「お庭焼き」であった可能性も考えられます。

この屋敷地の当主自身も邸内で陶芸に親しんだ可能性が高く、トチと呼ばれる窯道具や鞆鉢も何点か出土していました。

お茶道具類は数多く出土しています。志野茶碗・備前水差・織部向付といった茶道（抹茶）に用いられる焼き物の破片は少ないですが、これに対して煎茶道の道具は「瑞芝」「粟田」等の銘の入ったものを含む



煎茶道具

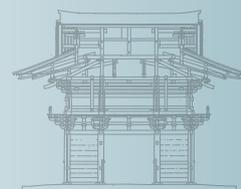
錦」という焼き物も確認されています。

煎茶道は、一般的に江戸時代の中頃から終わりにかけて盛んになったと言われていますが、今回の整理作業を通してこのことは頷ける状況でした。また、煙草も嗜んでいたようで、煙管はもちろんのこと灰落としと呼ばれる灰皿類も何点か確認されています。

こうして見てみると江戸時代の武士らしく、どちらかと言えば文人趣味豊かな日常生活が垣間見える気がします。

(村田 弘)

多数の涼炉（煎茶道で使われるお湯を沸かす道具）のほか染付・朱泥・灰釉の急須、京信楽系・瀬戸の煎茶碗が出土しています。少しめずらしいところでは、幕末から明治初年にかけて伊予で焼かれた磁器に彩色の絵付けをした煎茶碗、いわゆる「郡中十



継桜王子跡社殿の保存修理

継桜王子は、田辺市中辺路町野中^{のなか}に位置する、熊野古道沿いの王子社跡^{のなかに}の一つで、一間社^{いっけんしゃ}、隅木入春日造^{すみぎいりかすがづくろ}、屋根銅板葺の社殿が建てられています。社殿の建立年代は明らかではありませんが、様式などから十八世紀後半頃とされ、修理中に行った調査からもその頃と判断できそうです。

社殿へ向かう参道の両脇には、県指定の天然記念物である「野中の一方杉」が林立し、近くには「秀衡桜^{ひでひら}」や「野中の清水」といった名所も存在するなど、現在も参詣者が多く行き交う場所となっています。平成十二年に「熊野参詣道^{さんけいみち}」の一部として国史跡に指定され、同十六年にはユネスコの世界遺産に登録されました。

小規模な社殿ではありますが、以前は覆屋^{おほい}の中にあつて、木部は塗装や彩色で包まれ、華やかな外観であつたと推察されます。昭和の終わり頃に覆屋が外されると、側面壁板の彩色などは風雨に直接曝^{さら}され、修理

前には完全に剥落^{はくらく}していました。また、土台や柱足元、縁廻り^{えんまわ}では蒸れ腐れをおこし、その影響から建物が大きく傾いてしまふなど、修理が必要な状態でした（写真1）。そこで、国の補助事業として、平成二十六年から木工事と塗装工事を主とした保存修理を行うことになりました。

木工事では、最初に縁廻り部分を分解し、次に建物ごとを持ち上げる作業（揚屋^{あひや}と言います）を行つて、基礎石の調整、破損した木部の補修や取り替え、建物の傾きや歪^{ゆが}みの修正などを順番に行い、ふたたび元の位置に据^すえ戻し、最後に縁廻り



写真1 修理前の社殿



写真2 木工事完了時の社殿

部分を補修しながら組み直しました（写真2）。

塗装工事は、木工事に続いて実施する予定でしたが、修理中の痕跡調査で壁板の凶案がおおよそ把握できたことから、追加調査を行つて復原を目指す方針に変更したため、工期の関係で施工を先送りさせました。竣工を迎えた際には華麗な姿が現れることかと思ひます。（下津健太郎）

彫刻でにぎやかに飾るのが、和歌山県に残る室町時代後期から江戸時代初期にかけてのお寺や神社の建物の特徴です。竜や猿、鳳凰といった想像上の霊獣たちのほか、梅やもみじ、雀に猫など身近なモチーフが見いだせるのも大きな魅力となっています。

一方、梶取本山とも呼ばれる大寺院である和歌山市の総持寺は、少々趣を異にします。県指定文化財である本堂は江戸後期、総門と鐘楼は前期の建物ですが、木部に具象的な彫刻を見つけることが出来ず、わずかに屋根に瓦製の唐獅子や鬼が見いだせる程度です。同じく湯浅の深専寺本堂（県指定）においても同様で、浄土宗西山派の建物の特徴といえるかもしれません。いずれも規模が大きく、柱や組物などが整然と並ぶ豪壮さが特徴となっています。

現在総持寺では総門と鐘楼の修理工事を行っています。鐘楼を分解したところ、梁の上から建立時の棟札が発見されました。そこには「銅鐘以其餘財建」と記され、現在の梵鐘を新造するための寄進で鐘楼が建てられたことがわかりました。このように修理時は、普段見ることが出来ないことを知る機会でもあります。

この梵鐘も高い位置に釣るされているため、普段は見上げるばかりですが、鐘楼から下ろされた今、身近にその全容に触れることが出来ます。胴には寛永十一年（一六三四）に铸造されたことが記され、鐘を釣り下げるその頂部には、総持寺では稀少な彫刻「竜頭」を見ることが出来るのです。（多井 忠嗣）



解体修理のために下ろされた
総持寺鐘楼の梵鐘

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

このところ大相撲が元氣ですね。照ノ富士・逸ノ城など若手の台頭もさることながら、それ以上に「スー女」と称される熱狂的な女性ファンの存在が大きいのでしようね。なにしろ女子向けの相撲雑誌が刊行され、それが発売直後に完売してしまうそうですよ。

ところで相撲と言えば意外と「考古学」と関係が深いですね。古墳の周囲を飾る埴輪のなかに、まわし姿の力士をかたどった「力士埴輪」とよばれる形象埴輪があります。なかでも和歌山市の井辺八幡山古墳から出土している力士埴輪は、大型であるとともに取り組み姿をかたどったりリアルなものとして有名ですね。

埼玉県の行田市郷土博物館では、この秋「相撲——いにしえの力士の姿——」と題した特別展が開かれると聞いています。おそらく相撲にまつわるさまざまな考古資料が展示されるのでしようね。和歌山からは近年調査された岩橋千塚古墳群中の大日山35号墳から出土した力士埴輪が展示される予定です。

また、土俵の四隅には青・赤・白・黒の四色の房が垂らされていますが、これは四方四神、東の青竜・南の朱雀・西の白虎・北の玄武をあらわしたものです。

奈良県の明日香村にある有名な高松塚古墳やキトラ古墳の壁画にもそれぞれの壁にこれらの聖獣が描かれています。

余談ですが、この四色は日本語の中でも不思議な色ですね。語尾に「し」をつけて形容詞に転化できるのはこの四色のみです。おそらく具体的な色を離れ、精神的なものになっていたのでしようね。いずれにしても相撲の歴史は古く、その起源や背景を考える上でこうした考古資料は示唆的なものといえるでしょう。

ちなみに意外に思われるかもしれませんが、筆者は相撲が得意です。ひとり相撲ですけれど——。

（村田 弘）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2015年夏～2015年秋)

(公財) 和歌山県文化財センター

●講演会「地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会－」

場所：きのくに志学館 (和歌山県立図書館) 2F 講義・研修室 2015年 7月20日 (祝・月) 13:00～17:00

和歌山県立紀伊風土記の丘

●夏季企画展「岩橋千塚の前方後円墳」

2015年 7月22日 (水) ～ 8月30日 (日)

●風土記講座②「岩橋千塚の前方後円墳」

2015年 8月23日 (日)

●特別展「紀伊の地、大いに震う」

2015年 9月19日 (土) ～11月29日 (日)

●特別展セミナー①

2015年 9月27日 (日)

和歌山県立博物館

●企画展「きのくに・漢詩の世界」

2015年 6月13日 (土) ～ 7月12日 (日)

●企画展「わかやま城探検」

2015年 7月18日 (土) ～ 9月 6日 (日)

●高野山開創1200年記念特別展「弘法大師と高野参詣」

2015年 9月19日 (土) ～11月 1日 (日)

和歌山市立博物館

●特別展「近代スポーツと国民体育大会-紀の国わかやま国体－わかやま大会への道－」

2015年 7月18日 (土) ～ 8月23日 (日)

●イベント「休館日の博物館を探検しよう」

2015年 8月 3日 (月)

●コーナー展示「戦時下の人々、中筋家のくらしと美」

2015年 6月 2日 (火) ～ 8月 2日 (日)

●コーナー展示「紀州藩御用絵師-紀伊狩野家-、安原地区の中世」

2015年 8月 4日 (火) ～ 9月27日 (日)

高野山霊宝館

●「第36回高野山大宝蔵展」

2015年 7月11日 (土) ～ 9月27日 (日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 「和歌山城跡 調査地と三の丸跡地 航空写真 (北上空から)」
- 2 特集 「和歌山城跡の整理」
- 6 文化財建造物課 短信「継桜王子跡社殿の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話「古建築修理の逸話⑫ 竜頭」
「発掘屋余話⑩ 相撲」
- 8 催し物案内

風車71 (2015・夏号)

平成 27年 6月 30日

(公財) 和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財) 和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

maizou-1@wabunse.or.jp

2014年 7月 1日より、事務局が上記の住所に移転しています。